

11 小札に関する若干の検討

河崎の柵擬定地では、可能性のあるものを含めて4点の小札が出土している。本節では、このなかで5017と5018について、他遺跡出土例と比較しながら検討を加えることにする。

ここで再度両者の形態について記載しておきたい。5017は幅広長条形の小札で、札頭・札足は円形である。緘孔一列で、緘孔は第三緘孔まで確認できる。綴孔は第一綴孔で3孔、第二綴孔で2孔、覆輪孔は2孔確認できる。なお、第二綴孔には革紐が残存している。5018は長条形の小札で、札頭は斜めに切り落とされ、札足は水平である。綴孔は3孔確認できたが、その他綴孔および緘孔については錆により塞がれており不明である。なお、いずれも長さが10cm前後あることから腰札と考えられる。

東北地方北部では中世を含めても小札の出土遺跡は20遺跡にも満たない。その変遷については不明確な部分も多いが、今回は岩手県一戸町御所野21号墳出土例と青森県百石町根岸(2)遺跡出土例という、東北地方北部でも代表的な2例を比較資料としてとりあげたい。まず、御所野21号墳では開口部から43点の小札が出土している(高田他2004)。いずれも長条形の小札であり、長さは約7.5~10.0cm、札幅は約1.0cmである。緘孔は一列で第三孔まで、綴孔は第一綴孔で4孔、第二綴孔で4孔確認でき、下捌孔も2孔確認できる。21号墳の造営は8世紀代とされているが、後述する札幅の検討をもとにすると8世紀でも後半段階のものと考えられる。次に根岸(2)遺跡出土例であるが、本遺跡では使用時の状況で出土した塊を含めて約140枚の小札が出土しており、報文中で津野仁が詳細な形態分類と札幅の時期的変化についての考察を行っている(津野1995)。形状についての詳細は報告書に譲るが、津野は各地の出土例を挙げながら、札幅が7世紀後半から漸移的に狭くなっていくという傾向を指摘している。それによると、札幅が1.0~1.5cmである根岸(2)遺跡出土例は8世紀後半(第3四半期)に位置づけられるという。

ここで札幅をもとに河崎の柵擬定地出土例の年代的位置づけについて考えていきたい。津野仁の検討によると、7世紀前葉~中葉の小札では札幅は2.2cmあり、その後8世紀後半のものでは1.0cm前後にまで狭まるということである(津野1995・1998)。これをもとに本遺跡出土例について年代を考えていくと、5017は札幅が3.0cmと広く、札幅だけを根拠にするならば7世紀前葉より古いものと考えられる。これについては他の類例を探したうえで検討する必要があるが、7世紀以前(古墳時代後期)のものであるとすれば岩手県内出土の最古例として位置づけることができる。5018は札幅が1.6cmであり、8世紀第3四半期と推定される根岸(2)遺跡出土例、8世紀後半と推定される御所野21号墳出土例よりも札幅は広い。札幅だけをみれば8世紀第2四半期とされる事例とほぼ同じ札幅であることから(津野1998)、5018については8世紀前半に位置づけることができよう。

以上、簡単ではあるが本遺跡出土の小札について検討を加えてきた。いずれの資料についても岩手県内では最古段階に位置づけられるものであり、県内における鉄製武具の初現を考えるうえで貴重な資料といえる。とくに5017については、東北地方北部では希少な古墳時代後期に属すると推定されるものであり、これについては類例を探すなどをしてさらに詳細な検討を加えていく必要があろう。(村田)

参考文献

- 高田和徳他 2004 『御所野遺跡Ⅱ』一戸町文化財調査報告書第48集
 津野 仁 1995 「根岸(2)遺跡出土の刀子および桂甲小札について」『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』
 津野 仁 1998 「古代小札甲の特徴」『兵の時代 - 古代末期の東国社会 -』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター